

ネットなどで知っていた知識なんかとは比べものにならない。それは動画であったとしても同じだった。太陽のぬくもり、頬をなでる風、鼻腔を通る潮の香り。視界すべてに映る、穏やかな瀬戸内の島々。五感のすべてで感じる、豊かな自然。それは動画では分からなかった。しかし、そのすべてを否定する、この事件。

「せめて一矢報いたい——」

そう言って闘った、全島民の歴史。悔しさ。どうしてそこまで頑張れたのか、その行き着いた先にあるものは。

伝えなきゃ——

そう思うものの、そのスケールを思うとき、自分なんかが手をつけていいものかと沈思する。その繰り返しが、何度も何度も渚を襲う。

風呂から上がったことを告げに行くと、食堂にはすでに夕食が用意されていた。

「渚ちゃんはビールは飲むか？」

「あ、はい、少しだけなら」

民泊だからそんなに立派な食事はできないんだけど、と言いつつも、島の食事らしく、鯛を一匹塩焼きにしたものやら刺身やらエビフライやらが、食卓いっぱいにならされていた。

「これだけあれば十分です」

正直な気持ちだ。

「うちの家内が元気ならな、煮付けやら手の込んだもんが出せるんやけど、入院するもんやから」

缶ビールをプシュッと開け、一口注いだ。

「近くにですか？」

「近く言うたら近くやけど、島の外やからな」

「じゃあ大変じゃないですか。全部ご自分でされてるんですか？」

いかにも独り住まいをしている様子を尋ねると、

「まあな。子どもも、もう家を引き払って来んか言うてくれるんやけど、この家を放っとくわけにもいかんし」

植村の息子は本土で警察官をしていて、夫婦家族も一戸建て生活をしているという。

植村は渚にも飲むように、テーブルに置かれた缶ビールを勧めた。

「ほやから月に一度は息子のところに行って、家内のところにも見舞いに行ったりして、結構忙しいんで」

部屋の棚にいくつも飾られている写真立てに、家族の思い出が垣間見える。渚も缶ビールをプシュッと開けた。

「そうはいっても、家で独りっていうのも寂しいんじゃないですか」

ごくりと一口流し込んだビールが喉に染みる。

「うん、まあ、そう思うときもあるけど、独りが気ままでええときもあってな。それにこうやって民宿しとるといろんな人が来てくれて、話もできて楽しいし。いつまで続けられるかわからんけど、できるうちは続けた方が身体にええいうて、みんな言うてくれるしな」

強がっているようにも聞こえるが、恐らく実感でもあるのだろう。

「こんな小さな島やけど、結構歴史があるんやで」

そんな話でせっかくの客をしんみりさせては、と思っつか、話題を一転させた。渚も、「へえー、そうなんですか」と、眉唾な話として聞きはじめたが、そのあと聞かされたスケールは、渚の想像を超えていた。

「ほやな、まず西日本最古の貝塚があるわな。ヤマトシジミやら汽水域に生息する貝ばかりやから、その頃はまだ今みたいな海にはなってなかったらしいな」

「えっ、瀬戸内海って陸だったんですか？」

植村の話によると、海水面は今よりもずっと低く、瀬戸内は川から淡水の流れ込む湿地帯で、ナウマン象も闊歩していたという。その証拠に、象の牙や骨が底引き網に引っかかることもあるらしい。

そして数千年をかけて海水面が上昇すると同時に、山々から流れ込む淡水で、瀬戸内は多様性に富んだ豊かな多島海へと変貌していった。まるで古代のスペクタクルロマンを聞かされているようだ。目の前の刺身までが、すごく滋養のある味のような気がしてくる。

「弘法大師にも縁があってな、杖を突いたら水が湧いて出たいう湧き水もあるで」

これはさすがに眉唾物だ。渚は笑いながらビールを口にする。でも植村はいたって真面目に話をする。しかも、ビールが進むほどに、話は熱を帯びてくる。

「水が豊かやったということもあって、こんな小さい島やのに早ようから水田が盛んで、戦後の疎開時には四〇〇〇人の食糧を自給しとったいうんやから、すごいやろ」

時代によっては余った米を移出していたこともある、と付け加えた。これはさすがにすごいと思った。しかも、大昔ではなく現代の話だから信憑性もある。島の回りが豊かな漁場であることを思えば、それだけの人口が自給していてもおかしくはない。

「それに、この島は石でも有名やったんやで」

水の次は石か、と思う。

そういえば、朝見た石切場のような場所もそうだったのかも、と思う渚のビール缶は、二本目に移っていた。

「加工がしやすうて、平安時代には石の産地で有名やったという記録が残っとるんや。竈や流し、それにお寺の塔や、ほら、京都の——」

京都とまで？と驚いて言って、眉唾なのか、夢現なのか、分からなくなってきた。

「京都の桂離宮や！そこの灯籠とか、まあいっぱい残っとるらしいわ」

ビールのせい、話のせい、それとも疲れからか、朦朧とするなか、「千年にわたる豊島石」とか、「豊島千件石工千人」とかが耳に入ってくるが、渚の意識は途切れ途切れになっていった。

「疲れとるやろうから、もう部屋に行って休んだら」

植村の声に意識を取り戻し、素直に頷く。立ち上がりかけると、「今夜はぬくいから、もしかしたら明日の朝は霧になるかもしれんで」と付け加えた。

霧か、と特に気にも留めず、おやすみなさい、と返事をして部屋に引きあげる。

部屋に入ると、畳の上にはすでに布団が敷かれていた。場所が変わったからか、少し頭がスッキリしている。

とにかく、水や石、農業や漁業で、古より歴史を刻んできた本当に豊かな島だったということが頭に残る。

「近代に入ってから酪農が栄えたこともあり『ミルクの島』と呼ばれ、戦後間もなく先進的な福祉施設ができたことから『福祉の島』としても知られてきました。一九七〇年代から始まった産業廃棄物の不法投棄は、全国的にも最大規模の産廃問題となりましたが、不法投棄された廃棄物の処理もすすみ、環境の再生を目指した取り組みが続いています。」

船乗り場で渡されたパンフレットに目を通す。しかし、果たしてこれだけでどれだけの人がこの事件に関心を持つのか。ましてやこの島が抱えてきた、抱えさせられて

きた問題がどれだけ観光客に伝わるのか。そこにいた人々の姿がどれだけ伝わり、どれだけ想像できるのか。そう思うと、暗澹たる気持ちになる。

スマホのアラーム画面を呼び出す。せっかく来た旅先で見られる景色が特別なものなら、早起きしても罰は当たらないか、とぼんやり思い、いつもより早い時刻をセットする。

布団に身体を横たえる。いろんな気持ちが押し寄せ、思っていた以上に疲れが溜まっていたのだろう。慣れない、パリッとしたシーツに身体を預けると、まるで敷き布団が泥にでも変わったかのように沈み込むような気がした。昭和感あふれる室内灯の明かりを消すより先に、そのまま意識が遠いていった。

＊

アラーム音で意識が戻る。まどろみながら、スマホを手で探る。

5月11日 5:00

仰向けになったままゆっくり目を開けると、前の晩に見た昭和感漂う照明が目に入る。深く息を吐き出しながら、二度寝することをあきらめ、えいっ！と上体を起こす。遮光カーテンの縁が少しだけ明るい。

立ち上がり、カーテンを開けて目が覚めた。何も見えない。

真っ白――

窓を開けると、白が目の前を覆い尽くす。幻想的、神秘的でありながら、見ていてどこか恐怖心が湧きあがる。

『今夜はぬくいから、もしかしたら明日の朝は霧になるかもしれんで』

昨晚聞いた植村の言葉が思い出される。

「霧だ――」

小さく声が漏れた。湿り気のある、懐かしい匂いが鼻の奥にまで入り込んでくる。

民泊している家の庭先まではかすれて見えるものの、その先となると、いったい何があったのかよく思い出せない。海も見えた気がするが、距離感がなく、空恐ろしい。

白い悪魔に誘われるかのように、スリッパを履き、外へ出る。

朝の肌寒さに、両方の手のひらで二の腕を摩る。

昨日、植村の車に乗って来た道を下っていくと、簡単に港に出たような気がした。